

大学紛争と私

北川ふさえ

「大学紛争のころ」の座談会ということで、文書館長からせっかくお声をかけていただいたのに九回を数える集まりに二回しか出席できなかった。とはいえ、当時の私は語るほどのことは何も経験してない実感した。ここでは記憶の糸をたどり、そのころの私について少し記させていただくこととした。

私が採用になった昭和四三年五月は、職員の大運動会や親睦会も盛んに行われ、大学への出入りはまだ自由であった(大学の今のみを知る人が読むと、この文章は理解することすら陳腐で難しいと思われる)。やがて学生のデモに遭遇することになり、立場が管理者側であることを自覚することとなった。学生と職員との玄関先の押し合い、引っ張り合いは、各部署から本部建物へと移っていった。この時対応するのは、学生と近い年くらいの学生部の職員が中心であり、立つ場が入れ替わっても不思議はないと感じていた。

当時の私は、職員研修を担当する係から給与計算をする係に異動していた。職員給与の支払いは、最重要事項の一つであったので建物封鎖への懸念から、学内のあちこちに事務室を求めて転々とする事となった。先ずは工学部敷地内の工業教員養成所の建物、次に附属学校、そして歯学部へと私が担当した約一〇カ月の間に三箇所移動を余儀なくされた。やがては殆どの部署で事務室の転居が行われた。

大学の正門では、最初のころは簡単なバリケードを作って、構内へ

入る人を学生がチェックしていた。そのバリケードもだんだんと迷路状に大がかりに組まれ、活動学生のみ通路と化していった。各部署の玄関は机や椅子で封鎖され、本部建物は彼らの生活場所にと変えられていった。大学の周囲からは、投石、火炎瓶、連日のアジ演説と抗議も多く、迷惑者という目で見られていた。

次に、私は庶務係へ配置換えとなり、当時本部事務局を置いていた大学の敷地の外、米田ビル(東千田町の大学敷地のすぐ北方向にある)で勤務することとなった。ガリ版刷りの会議原稿やお知らせを、手を真っ黒にしながら輪転機で印刷し、配布した。

昭和四四年八月一七日、機動隊の導入により明け渡された本部建物はさながら荒れ狂った嵐の後のようであった。その後片付けもそこそこに改革委員会の事務担当として三カ月間、熱気溢れる先生方の傍らでお手伝いすることとなった。

このような事務職員としての速習コース(?)を歩ませていただき、昭和四五年三月秘書室勤務となった。第四代飯島宗一学長は、当時全国で一番若く(四六歳)して学長に就任されており、その下でおよそ七年間働かせていただくこととなった。当時はパソコンは元より、ワープロもなく、多くの執筆依頼が来ていたが、清書は一度も依頼されなかった。原稿用紙を一枚も反古にされることなく、樹目にきちんと並んだ文字の原稿を手渡された。欧文タイプのみが秘書らしい仕事で、英語、ドイツ語を夜間で学びながらの勤務となった。

一応、大学としての体裁は回復したとはいえ、外からは毎日アジ演説が二重ガラスを通して飛び込み、電話口での対応は度々困難さを

伴った。

学生に対しては、授業の制約を受けた学生への手当て、体育会を中心とした学生活動の支援、オリエンテーションキャンプの開始と先生方も随分積極的に新しいことに挑戦しておられた。もちろん活動家学生のビラ配りは、森戸道路や教室で日常的に行われていた。

部局長、評議員の先生方のお集まりも夜遅くまで頻繁に持たれた。運営について学長とのご相談も多く、「ここで三分ありますから」、「立ち話の一分でしたら」、「食事時間は一〇分しかありませんが、ここで……。」「三分あれば大丈夫だから」というような状況であった。

まるで医院の待合室のようにその隙間を求めて来られる先生方がお声をかけてくださり、後に学長とされる方々にもここでお目にかかった。特に印象に残った先生方のお名前を挙げてみると工学部の丸山益輝先生（中国出張中に客死された）、佐々木和夫先生、理学部の山本勇麓先生、梅垣嘉治先生、医学部の黒住静之先生、辻守康先生、原医研の横路謙次郎先生、教育学部の荘司雅子先生、野地潤家先生、文学部の藤原与一先生、水畜産学部の藤山虎也先生、村上豊先生、そして教養部の今堀誠二先生、羽白幸雄先生、藤原健蔵先生、川村毅先生、米山穰先生。広報委員会では稲賀敬二先生、松元寛先生、仲濱道夫先生。また、当時の大学の先端組織であった大学教育研究センター、保健管理センターの先生方からいろいろなお話を伺わせていただいた。文学部の高山一十先生、教育学部の三好稔先生、内海巖先生、医学部の百々次夫先生、浦城二郎先生、初代歯学部長の嶋良男先生といった諸先生方は大御所として君臨しておられた。平和関係では、

森滝市郎先生、佐久間澄先生、理論研の先生も度々お見えになっていた。

初代学長の森戸辰男先生も何度かお見えになり、皇至道先生、川村智次郎先生と歴代学長にお目にかかる機会もここで得たものである。

皇先生にご招待いただいたお食事会では、初めての経験として、緊張と高級感のみが記憶に残っている。

文部省からは井内慶次郎先生、大崎仁先生も何度かお顔を見せてくださった。

こうしてお名前を挙げていると、その時々先生の表情やお話の一端が懐かしく思い出される。折に触れ、こういった方々のお話を伺う機会が得られたことは、後に学生として教えを受けた先生方と併せて私にとってかけがえのない財産と感じている。

当時の私の中で一番の有名な人は、学内の状況が少し落ち着いてからお迎えした常陸宮殿下であった。お出しする飲物や経路についても事前に視察があり、警備ものものしく、緊張したものである。また、さまざまな国からの Air Mail やお客様が外国を身近にさせてくれたものである。大学紛争がなければ、私のような者がそういった方々にお目にかかる機会を得ることなどなかったはずである。とにかく必要なことに対応できるようにと一所懸命であった。

当時の記録としては、「学内通信」に多くの情報が掲載されているが、私の記憶の断片をつないで日常の一端を披露させていただいた。先生方のお名前からどなたかの記憶に触れることがあれば幸いである。